

『桶物語』の言語論

田 中 一 穂

I

眼前に飛びでてきた動物を一匹一匹名指したアダムの言葉が即、動物の名前となったいわば物と言葉が一致していた時代をよし、とするユートピア思想がいわゆる普遍言語運動の核を成していた。しかし擬古典主義時代における命名とはアダム言語 (*lingua Adamica*) のように素朴な命名行為ではなかった。名指す、とは十七世紀の普遍言語理論ではなによりも事物を符号に置換し図表に位置づけることと等しかったのである。⁽¹⁾ たとえば普遍文字、真正文字などを思い起こそう。⁽²⁾ そこでは言語学者独自の範疇によって分類整理された言葉と物が一対一関係を結ぶ。事物と対応させられた既存の数字、アルファベット、あるいは図形等は、しかし、言語学者独自の統辞法がなければ意味をもたない。己れのコミュニケーションを己れ自身に閉ざすのである。普遍言語とは、せいぜい暗号にも似た記号の堆積物にすぎず、⁽³⁾ 同時代の人々にさえ眉唾物とみなされ、⁽⁴⁾ また現在、使用する人もいない。

多義語や同義語などの曖昧な表現を避け、平明で簡単な言葉使いをめざした十七世紀イギリスにおける国語改革運動も普遍言語の運動と無関係ではなかった。⁽⁵⁾ 各分野の数多の論争も使用する言葉の曖昧さが原因であって、人々は同一の事柄にたいして様々な語を用い、異なった命題をたて、あるいは逆に同一の語を様々な意味に用いる。誤謬が増殖し誤解が誤解を生む。その反動からうまれた国語統制機関 (English Academy) 設立運動は言葉と物の一対一対応をめざした普遍言語の運動と基本的には連動していたのである。根底に言語の秩

序化の衝動が潜んでいたのはいうまでもない。(6)

言語の自意識が高まった時代の申し子として、⁽⁷⁾ スウィフト (Jonathan Swift) もまた言葉と物の関係を見逃しえない一人であった。⁽⁸⁾ 『タトラー』 (The Tatler) や書簡での度重なる発言や、『ガリヴァー旅行記』 (Gulliver's Travels, 1726) のリリパット (Liliput) 言語、ブロブディングナグ (Brobdingnag) 言語などはそれを語る良い例である。特にバルニバルビ (Balnibarbi) のラガド学士院 (the grand Academy of Lagado) では言語学者が学生たちと共に日夜、奇妙な研究にいそしんでいる。また賢馬フウイヌム (Houyhnhnm) の話す言葉は普遍言語に近い。⁽⁹⁾ 普遍言語学者は最終的には賢い馬となるのである。

本稿では普遍言語の問題がスウィフト初期の作品『桶物語』 (A Tale of a Tub, 1704)⁽¹⁰⁾ では如何に扱われているかを検討してみたい。なるほど『桶物語』の本筋を従来の批評にならってキリスト教寓意物語と解せば、⁽¹¹⁾ 第二章でピーター (Peter) が父親の遺言書を自己流に曲解しながら街の流行に合わせて着飾っていく様子は、一面ではカトリック教会が聖書の権威を軽んじて典礼、教階制、煉獄教義、祭服、聖像聖画崇拜等に傾倒していく過程と対応しているのであろう。⁽¹²⁾ しかし彼のこだわりかたをつぶさに眺めてみるとピーターもまた言葉と物の病に取憑かれていることに我々は気づく。街で次から次に流行していく服装の装飾品を現実に存在する様々な物レズと仮定すると、彼がそれに一致する言葉フュルバを遺言書に探し求める行為は驚くほどある言語学者の身ぶりに似ているのである。以下、その具体例を検証し、普遍言語運動の限界を見極めてみたい。

II

現実に存在する様々な物のひとつとして都会で流行する最初のアクセサリーは、「肩章」“Shoulder-knots” (p. 82) である。この物に一致する言葉を「同じ言葉で」“totidem verbis” (p. 83) 三人兄弟は遺言書に探し求めるが遺言書にはない。そこでのちにピーターであることが判明する「三人の中で一番学問の

『桶物語』の言語論

ある一人」“one of the Brothers who happened to be more *Book-learned* than the other two” (p. 83) が音節、文字に執着しはじめる。同じ言葉、さらには「同じ音節で」“*totidem syllabis*” (p. 83) も駄目なら第三番目の方法で、すなわち「同じ文字で」“*totidem literis*” (p. 83) きっと見つけたせるにちがいない、と彼は妄想をいだく。同一性の希求は共通要素の発見を強制しあらゆるものを飽くなき要素への分割へと導く。細分化の病である。⁽¹³⁾ しかし運良く S, H, O, U, L, D, E, R は捨いだせたものの K がどうしても見つからない。

Discovery was also highly commended, upon which they fell once more to the Scrutiny, and soon picked out S, H, O, U, L, D, E, R; when the same Planet, Enemy to their Repose, had wonderfully contrived, that a K was not to be found. (p. 84)

この困難を学者は如何に切り抜けたのか。物と一致する文字をどうしても捏造することに執念を燃やす例の「区別上手の兄」“the distinguishing Brother” (p. 84) はそこで K は違法の文字であり Cこそが正しいと主張するのである。

And by consequence it was a gross Mistake in our Language to spell *Knot* with a K, but that from henceforward, he would take care it should be writ with a C. (p. 84)

この挿話をたんに聖書英訳にからむ綴字改革運動諷諭とだけみるのは正しくない。物＝言葉を追求するあまり文字拘泥の泥沼に陥った学者の最終通告は K の廃止、という独りよがりな規則制定が問題なのだ。統制言語の胚胎である。既存の K を廃し、既存の K はすべからく C である、という論理からパンはパンではなく羊肉であり葡萄酒である、と弟たちに頑固に勧めるピーターの威圧的態度（第四章、全質変化諷諭）に至る道程はそれほど遠くはない。だがその行程には段階がある。順次、追ってみよう。

肩章の流行が廃れると次に流行したのは「金モール」“*Gold Lace*” (p. 84)

である。しかし金モールと同じ言葉は遺言書にはない。そこで「前にいった博学な一人」“the Learned Brother aforesaid” (p. 85) の思いついた解決法はこうだ。なるほど金モールという言葉は遺言書にはない。しかし遺言には「二種類ある」“duo sunt genera” (p. 85) ことを忘れてはならない。すなわち口頭と文書である。文書にはないからといって口頭遺言についても同じ事を主張するならとんでもないことである。博学な一人の論法に従えば分け方を適当に操作すればある物を己れの目録に封じ込めることが可能なのである。分類法の登場である。金モールの存在は父親の口頭遺言に、父親の口頭遺言は父親の下男に、父親の下男は兄弟が子供の時分のある人の言葉に依存することになる。分類は果てしなく続き本当のところ誰が言ったのか、という真実には決して到達しえないが架空的存在の捏造には手を貸すことになる。

Brothers, said he, You are to be informed, that, of Wills, duo sunt genera, Nuncupatory and scriptory: that in the Scriptorio Will here before us, there is no Precept or Mention about Gold Lace, conceditur: But, si idem affirmetur de nuncupatorio, negatur, For Brothers, if you remember, we heard a Fellow say when we were Boys, that he heard my Father's Man say, that he heard my Father say, that he would advise his Sons to get Gold Lace on their Coats, as soon as ever they could procure Money to buy it. (pp. 85-6)

金モールの次に流行した裏地用の美しい「真紅色の縹子」“flame Coloured Sattin” (p. 86) の場合も金モールの時と同様である。ただし今回は遺言文書のほうが二種に分類される。物と一致する言葉を捏造するためにさらに細分化がすすむのである。真紅色の縹子の存在は父親の遺言文書の一部である添書に、添書は父親の父親の犬番人の手に依存する。

I remember to have read in Wills, of a Codicil annexed, which is indeed a Part of the Will, and what it contains hath equal authority with the rest. Now, I have been considering of this same Will here before us, and I cannot

reckon it to be compleat for want of such a Codicil. I will therefore fasten one in its proper Place very dexterously; I have had it by me some Time, it was written by a Dog-keeper of my Grand-father's, and talks a great deal (as good Luck would have it) of this very flame-colour'd Sattin. (p. 87)

なんととしても流行物に見合う言葉を遺言書に探し続けた「学者」“the Scholastick Brother” (p. 89) は、しかし、当時は流行の変化が激しかったので、その都度口実を見つれたり矛盾の解決をすることにさすがに飽きてくる。「多数の物とそれに等しい数の言葉による伝達」“when men deliver'd so many things, almost in an equal number of words”⁽¹⁴⁾ などという絵空事は所詮、夢想者の寝言にすぎなかったのである。「遺言の言葉の数よりは流行の方が少し数の多いこと」“the Fashion prescribed somewhat more than were directly named in the Will” (p. 90) をついに認めた彼はそこで遺言書の金庫への一時保管を提案する。⁽¹⁵⁾ そうすればたとえ物と言葉の一致をみなくとも流行に乗り後れることはない。「同じ言葉で」を旗印に物＝言葉体系を目論んだ彼がその形勢不利を判断するや否や自らの權威に俄然、頼らざるをえなくなるのである。「銀の縁紺」“Silver Fringe” (p. 88)、「男と女と子供の印度人の像の刺繍」“Embroidery with Indian Figures of Men, Women and Children” (p. 89) 流行の少し後で「無数の銀の金具付きの飾り緒」“an infinite Number of Points, most of them tagg'd with Silver” (p. 90) が広まった時に彼は“totidem verbis” 遺言の文面から推定はできないにしても、飾り緒は絶対に父親の掟に従うと權威をもって言明せざるをえない。

Upon which the Scholar pronounced *ex Cathedra*, that *Points* were absolutely *Jure Paterno*, as they might very well remember. 'Tis true indeed, the Fashion prescribed somewhat more than were directly named in the Will; However, that they, as Heirs general of their Father, had power to make and add certain Clauses for publick Emolument, though not deducible, *totidem verbis*, from the Letter of the Will, or else, *Multa absurda se-*

querentur. (p. 90)

ピーターが物に見合った言葉を逐次求め続け、そのたびに自らの権威に頼らざるをえなくなった顛末を第二章ではみた。⁽¹⁶⁾ 一方、ジャック (Jack) の場合はどうか。彼は従来の言葉と物という二項関係に加えて第三項を仮定する。すなわち観念がそれである。⁽¹⁷⁾ ピーター対ジャックのこの相違は物質名詞対抽象名詞の対立がひきおこす機能によるところが大きい。第二章でピーターがあれほど固執した流行物、すなわち肩章、金モール、真紅色の縹子、銀の縁綾、男と女と子供の印度人の像の刺繍、無数の銀の金具付きの飾り緒などはすべてある物の名であり、その物の名がピーターにとっては問題なのであった。しかるにジャックはある観念に名を与えるのである。ひとつにはかつてピーター卿から受けた虐待の記憶が生みだした怨恨の激しさと、またもうひとつには父親の遺言命令を尊重する気持ちとが闘ぎ合う気分にもっともらしい名前を与える工夫をした彼は「熱狂」“Zeal”という立派な名でそれを呼ぶ。

However, for this Meddly of Humor, he made a Shift to find a very plausible Name, honoring it with the Title of *Zeal*. . . (p. 137)

しかも物—観念—言葉という図式を手玉にとるようにそれが観念より言葉に進み、次いである真夏の酷暑に有形の物質にまで成熟せる次第が問題となるのである。

. . . *Zeal*, shewing how it first proceeded from a *Notion* into a *Word*, and from thence in a hot Summer, ripened into a *tangible Substance*. (p. 137)

このジャックの熱狂が文字通り物と化す例は第十一章にある。ピーターにとって遺言書とは物と一致する言葉を参照するためのいわば既成の事典であった。ところがジャックはあまりの熱狂の結果、遺言書自体が実は物 (羊皮紙) であり、しかもそれが肉や酒や布や煉金丹や普遍靈薬であることを証明すると宣言

するのである。

*Gentlemen, said he, I will prove this very Skin of Parchment to be Meat,
Drink, and Cloth, to be the Philosopher's Stone, and the Universal Medicine.*
(p. 190)

ピーターによる物の言葉への封じ込め作戦は結果的には物の無数の量に言葉が追いつかず破綻した。ところがジャックの熱狂は遺言書を物とみなしたうえに、それを複数の物としてみなす。つまりひとつの物が多数の言葉と対応しはじめるのである。言葉と物のゆるやかな結びつきもそれをゆるめすぎてしまうとひとつの物が無数の言葉へと拡散し果てがたい。言葉の雲散霧消状態の中では己れが他者との接点を見いだすのは難しい。ジャックは上記引用のように宣言するのみならず実際に羊皮紙をナイトキャップ、雨傘、包帯、薬などとして利用するが、羊皮紙を食べたり飲んだり着たりできるのはジャック一人だけであり、その行為は他人の眼には奇異にうつる。物の言葉への解放も己れと他者との健全なコミュニケーションの道を閉ざしてしまうことに変わりはないのである。物の言葉への閉じ込めも解放も共に一方通行にすぎると健全な伝達を破碎する。ジャックは観念をとおしてピーターに先祖返りするのである。とりわけ言葉＝物の不動の関係がもたらす究極のといってもいい悲劇をジャックは経験することになる。ついにジャック自身の話す言葉が遺言の文句そのものとなり、彼は遺言以外の言葉を口に出さなくなる。そのためにある時、人の家で急に便意を催したジャックは、トイレに行く道を訊く遺言の文句が思い出せず、その場で粗相する。

With Analogy to these Refinements, his common Talk and Conversation ran wholly in the Phrase of his Will, and he circumscribed the utmost of his Eloquence within that Compass, not daring to let slip a Syllable without Authority from thence. Once at a strange House, he was suddenly taken short, upon an urgent Juncture, whereon it may not be allowed too

particularly to dilate; and being not able to call to mind, with that Suddenness, the Occasion required, an Authentick Phrase for demanding the Way to the Backside; he chose rather as the more prudent Course, to incur the Penalty in such Cases usually annexed. (p. 191)

引用はたんに新教徒の聖書至上主義諷諭にとどまるものではない。言葉＝物の不動の固定化を計った普遍言語の運動は知の自閉症状をもたらし己れと他者との健全な伝達行為を破砕したのだ。トイレの道を訊く普遍言語などありはしないのである。いや、仮にあったとしてもそれを表現し、他者に理解させるには相当な時間がかかるだろう。⁽¹⁸⁾ 簡便の行きつく先は不便であったといえようか。

以上みてきたように父親の遺言書をめぐるピーターとジャックの物語は内容的には宗教の腐敗を諷しながらもその実、諷刺の手口には言葉と物の問題が秘かに絡んでいた。しかし「宗教と学問の腐敗」“the numerous and gross Corruptions in Religion and Learning” (p. 4) の二つの主題のうち前者が主題となっている本筋は量的には作品全体の三分の一にすぎない。残りの三分の二は脱線部で構成されている。古代人近代人優越論争を背景にした学問の腐敗が主題となっている脱線部では、⁽¹⁹⁾ 謎めいた逸話に絡めて普遍言語をめぐる問題がさらに深く考察されている箇所が少なくない。そこで以下では脱線部における普遍言語の内包する範疇、還元、数、記号表記等の諸問題をより精緻に検証し結論としたい。

III

普遍言語における範疇の問題は事物を整然と分類するための目録作成と密接な関係がある。事物が整然と図表上に分類されるためには事物をその中に過不足なく盛り込むための範疇の数の決定が重要となるからである。⁽²⁰⁾ そこでたとえば類概念、種差、種等の数の決定に注意がはらわれる。語り手三文文士(Hack)⁽²¹⁾ が脱線部第一章の劈頭で「演説機関の目録」“the List of Oratorical

『楠物語』の言語論

Machines” (p. 57) 作りに専念し、あくまで「三」という数字に固執する理由はこうした範疇観と関係があるのではないだろうか。演説機関とは文士によれば群衆の中で己れの声を聞かせるために他人から邪魔されず大いに喋りたい者が使用すべき木製構造物のことである。それは三つしかない。すなわち「説教壇、梯子、巡回演壇」“the Pulpit, the Ladder, and the Stage-Itinerant” (p. 56)。「法廷」“the Bar” (p. 56) も先の条件を一見、満たすようにみえるが第四番目の榮譽は許されない。なぜならば平らな低い位置のために絶えず同席の仲間から妨げられる虞れがあるからだ。また「判事席」“the Bench” (p. 56) 自体は適当な高さに上げられてはいるが、やはり要求を申し立てる権利はない。文士に言わせれば、その理由はこうだ。「判事席と法廷を演説機関の目録から除外する論拠が他に全然ないとしても、これを加えると数が狂ってくるから困るといえば文句はあるまい。その数だけは絶対に変更しない決心で私はいる」(57頁)。文士はこのいささかいかさまじみた方法を哲学者や偉い物識りに教わったという。彼らの分類方法はというと、ある神速なる数を鼠屣にして自然のあらゆる部分を類概念でも種でもその数の範囲内に縮少し、含め、合わせる。

... in imitation of that prudent Method observed by many other Philosophers and great Clerks, whose chief Art in Division has been, to grow fond of some proper mystical Number, which their Imaginations have rendered Sacred, to a Degree, that they force common Reason to find room for it in every part of Nature; reducing, including, and adjusting every *Genus* and *Species* within that Compass, by coupling some against their Wills, and banishing others at any Rate. (p. 57)

それにしても“reduce”とは意味深長な言葉である。こうした分類方法を編み出す哲学者とは全人類の観念を己れの観念とそっくり同じ長さと同幅と高さで縮少することができると信じている種族にちがいない。

For, what Man in the natural State, or Course of Thinking, did ever con-

ceive it in his Power, to reduce the Notions of all Mankind, exactly to the same Length, and Breadth, and Heighth of his own ? (p. 166)

“reduce”とはまた還元（根源回帰）でもある。万物の起源を原子と空虚の觀念に還元せしめたエピキュロス（Epicurus）や渦動説を唱えたデカルト（Cartesius）ら哲学者のみならず還元の病は作品全体にわたって蔓延している。アイロン、ヤード尺、針を駆使して布の裁断、裁縫から仕上げを行なう仕立屋のごとく毎日、人間をせっせと製造しては次々に切れ端を捨てているあの謎に満ちた万物衣裳神を「還元機構」（reductive system）⁽²²⁾のひとつとみなしたのはハース（Philip Harth）であった。万物衣裳神の信仰体系においてはマクロコスモスのみならずマイクロコスモス（人間）も「小上衣」“*Micro-Coat. . . *Alluding to the Word Microcosm, or a little World, as Man hath been called by Philosophers” (p. 78) にすぎない。またあらゆる狂気の起源さえもその下層部から脳髄への上昇による「精気」“Vapor” (p. 163) へと還元してしまう何でも還元主義は範疇の数でいえば「一」が問題である。いつのまにか「三」を問題にしながら「一」へと脱線したが、それには必然的理由がある。というのはひとまず「三」という数に固執する文士はその二大強敵なる「七」と「九」の陣営から数多の脱走者をも味方に引き入れることに成功した、といったんは誇る。しかし範疇の数など所詮、決定者の恣意性の産物以外の何ものでもないからである。「三」の支配は長くは続かない。決定者の気まぐれで如何様にも変化するからである。三種の批評家（第三章）、三種の読者（皮相な読者、無智な読者、物識りの読者）、と「三」の圧制が続いたあと第十章では「七」が勢力を盛り返す。

It were much to be wisht, and I do here humbly propose for an Experiment, that every Prince in *Christendom* will take seven of the *deepest Scholars* in his Dominions, and shut them up close for *seven* Years, in *seven* Chambers, with a Command to write *seven* ample Commentaries on this comprehensive Discourse. (p. 185)

「七」だけではなく「九」も抬頭してくる。

I have couched a very profound Mystery in the Number of O's multiply'd by *Seven*, and divided by *Nine*. (p. 186-7)

以前はあれほど「三」いちずにこだわった文士ではあるが今や「七」、「九」のみならずあらゆる数が彼の脳裡を行き交う。範疇の数決定に端を発しながら文士は屋根裏の数学者となるのである。普遍言語はまた数学的解析法とも切り離しえない。⁽²³⁾ 代数の解析が教えるように、どの数も一定の根源的要素からつくられており、一義的な仕方です素因数に分解され、またその積として表現されるものであるとしたら、同じことは一般にどの認識内容にも当てはまる。素因数への分解には単純観念への分解が対応することになる。そしてこの両者は本質的に同じ原理に従い、同じひとつの包括的方法によって成立させられるにちがない、などと考えた普遍言語学者もいたのである。⁽²⁴⁾ とところが将来『桶物語』の注釈事業に当たる学者のために、と勧める文士の数学は普遍言語と認識の臨界点を突く。63 ($3^2 \times 7$) 日間、第二章、第五章などといった数や怪しげな演算の駆使に注意したい。

Also, if a devout Brother of the *Rosy Cross* will pray fervently for sixty three Mornings, with a lively Faith, and then transpose certain Letters and Syllables according to Prescription, in the second and fifth Section; they will certainly reveal into a full Receipt of the *Opus Magnum*. Lastly, Whoever will be at the Pains to calculate the whole Number of each Letter in this Treatise, and sum up the Difference exactly between the several Numbers, assigning the true natural Cause for every such Difference; the Discoveries in the Product, will plentifully reward his Labour.

(p. 187)

作品の真の理解のためにこの種の操作を現実に行う学者はまずいないだろう。数学者の奇矯は、しかし、数字無しには成立しえない。ここで数字と普遍言語の関わりについて整理しなおしてみようと思う。それは普遍言語における記号表記の問題、とりわけ象形文字のような表意文字の孕む問題にも関係してくるはずである。

数字1と数1という概念、あるいは数字0と数0という概念の間にはなんら相似性はないが、これらの合成語10という数字はさきの二数字にたいして一定の関係をもち、しかもこの関係にたいして、数10であらわされる概念と、数1や0であらわされる概念との関係は対応している、と考えた普遍言語学者がいた。⁽²⁵⁾ この場合、記号の選択は任意ではあるが、記号同士の結合は完全に動機づけられ、秩序づけられている。しかし記号の選択は任意であるとはいうものの任意ではなく動機づけられているほうが、より理想的であり、一層、好ましくもあるのである。それはたとえば円のような図形であり、したがって図形はもっとも有利な記号なのである。⁽²⁶⁾ 記号に関する以上の考察はそのまま普遍言語の記号表記において象形文字のような表意文字を理想とする行き方と、文字における表意性にそれほど拘泥しない行き方に対応するが、⁽²⁷⁾ 第三章で文士が古代作家の書物の中から発見した象形文字は以外な事実を暴露する。次にそれを解説してみよう。

象形文字とは文字の形そのものがある物をあらわす文字のことである。しかし文士が第三章で用いる“Hieroglyph”はある語がある物をあらわすという文士独自の意味で使われている。しかもその語がまるで象形文字の本性、すなわち文字=物、文字と物との一対一対応を示すかのごとく物との対応関係を示すのである。ここで物とは「批評家」「Critick」であり、語とは古代前期の作家にとっては「驢馬」「ASS」である。では批評家=驢馬の件りをみることにする。古代前期の作家は真の批評家についてそれぞれ特殊な記述を試みているのだが、その種の事柄に筆が触れる時は実に慎重を極め、「神話と象形文字より先へ進むことは絶対にしない」「adventuring no farther than *Mythology and Hieroglyphick*” (p. 97) ののである。そして注目に値いするのは、作家がこの問題を謎めかして論ずるに当たり、その性癖に応じて話の中身だけは変わってい

『桶物語』の言語論

るが、一般に用いるところの「象形文字は同一」“the very same *Hieroglyph*” (p. 98) であるということ。パウサニ阿斯 (Pausanias) によればアルギア (Argia) のノオプリア人 (Nauplians) は驢馬が葡萄の若枝を嚙むところを観察し、葡萄の樹の剪定法を覚えたそうである。

... the Nauplians in Argia, learned the Art of pruning their Vines, by observing, that when an ASS had browsed upon one of them, it thrived the better, and bore fairer Fruit. (p. 98)

象形文字 ASS=Critick の図式に従えば、結局、批評家は書物の余計なところを咬みとることの好きな人間であり、学者のほうでもそれに気づき、自ら進んで余計な枝を著作から切り取るよう注意するに至った、とパウサニ阿斯はいいただ、と文士は言う。しかしこの挿話はたんに批評家諷諭にとどまるものではない。物 (Critick) をあらわす言葉 (ASS) が象形文字として認識されることが問題なのだ。物対文字が常に一対一対応を示す象形文字のごとく批評家が常に驢馬と一対一対応するのである。パウサニ阿斯のみならずヘロドトス (Herodotus) にとっても批評家はやはり驢馬なのである。しかもヘロドトスは同じ象形文字を用いながらもっと明瞭に、明確なる語句にて述べるのである。

But *Herodotus* holding the very same *Hieroglyph*, speaks much plainer, and almost *in terminis*. (p. 98)

さらにこの点に関してはクテシ阿斯 (Ctesias) はもっと「洗練されて」“refines” (p. 98) いて印度に住む同じ動物のことを問題にしている。明瞭、明確、洗練などといえば誰しも平明で簡単な言葉使いをめざした国語改革運動を想起せざるをえない。パウサニ阿斯、ヘロドトス、クテシ阿斯 (前) たちは物＝言葉の連結を強固に推し進める普遍言語推進派の一側面を担っているのだ。

言葉と物の一対一対応は、しかし、現実的には破綻せざるをえない。もっと自由に気持ちをあらわしたいと考えた古代後期の作家たちは従来の象形文字

(ASS) が原型(批評家)にあまりに近すぎるのでその使用をやめてしまわねばならなくなる。

In short, this Dread was so universal, that in process of Time, those Authors who had a mind to publish their Sentiments more freely, in describing the *True Criticks* of their several Ages, were forced to leave off the use of the former *Hieroglyph*, as too nearly approaching the *Prototype*, and invented other Terms instead thereof that were more cautious and mystical. . . (p. 99)

パウサニアス、ヘロドトス、クテシアス(前)の組が物と言葉の飽くなき連結に固執した組なのに対して、ディオドロス(Diodorus)、ルクレティウス(Lucretius)、クテシアス(後)の組はそれに必ずしもこだわっていない。後者の組にとって批評家(物)とは「悪臭を放つ花を咲かせるある草」“a certain Weed, which bears a Flower of so damned a Scent” (p. 99) であり、「人を殺す香りを放つ木々」“Trees, whose Blossoms with their Odour kill” (p. 100) であり、「毒液を吐く蛇」“Serpents. . . emit a poisonous Juice” (p. 100) なのである。文士は物と言葉の強力な結合とゆるやかな結びつきの対立をこんなところにも仕掛けているのである。

ところで後者の症状をジャックも一時、示したが、あまりにゆるみすぎた症状は第一章で既に語り手文士自身の言語にあらわれている。知恵は狐でありチーズでありサック酒入りポセットであり牝鶏であり胡桃である、と文士は言う。

. . . *Wisdom* is a *Fox*, who after long hunting, will at last cost you the Pains to dig out: 'Tis a *Cheese*, which by how much the richer, has the thicker, the homelier, and the courser Coat; and whereof to a judicious Palate, the *Maggots* are the best. 'Tis a *Sack-Posset*, wherein the deeper you go, you will find it the sweeter. *Wisdom* is a *Hen*, whose *Cackling*

『桶物語』の言語論

we must value and consider, because it is attended with an *Egg*; But then, lastly, 'tis a *Nut*, which unless you chuse with Judgment, may cost you a *Tooth*, and pay you with nothing but a *Worm*. (p. 66)

「物の表面や外皮」“the Surface and the Rind of Things” (p. 66) ばかり見て内側を調べてもらえぬ当世の文学事情一般を嘆いている点では話は一貫しているのだが、しかしこの種の思考にはきりがないのではないだろうか。もし紙面が許せば知恵は何某で、と蜿蜒と続けることも可能だろう。拡散の一步手前で踏みとどまらねばならない。そのためには外延ののびゆく先で思考を反転させればすむ。事実、反転するのである。第一章では外より内を重視した文士は第九章では一転して内より外を好む。しかも優男の裸体より衣服を好むことはとりもなおさず言葉の濫用を嫌い標準化をめざす方向性とも一致するのである。⁽²⁸⁾ 根底に十七世紀の有名なクリシュ「言葉は思想を被う衣裳」“Words are the Cloathing of our Thoughts”⁽²⁹⁾ が隠されているのはいうまでもない。

... the *Outside* hath been infinitely preferable to the *In*: Whereof I have been farther convinced from some late Experiments. Last Week I saw a Woman *flay'd*, and you will hardly believe, how much it altered her Person for the worse. Yesterday I ordered the Carcass of a *Beau* to be stript in my Presence; when we were all amazed to find so many unsuspected Faults under one Suit of Cloaths. . . (p. 173)

この種の思考を矛盾と試みたり、語り手文士の「忘れっぽい」⁽³⁰⁾ 性格に帰するのはたやすい。しかしそうではなく言葉と物をゆるやかに結んでいた糸が切れそうで切れない状態を文士はこの時、経験しているにすぎない。恣意的関係とはどんなに恣意的であれ関係性自体は否定されえないからである。ねじれながらも秘かに環はつながっているのだ。その種の兆候は既に語り手自身の知恵に内包されていたのである。

かくして言葉と物の強固な連結を推し進めた普遍言語の運動も、また言葉の

濫用も共にその限界を露呈してきたようだ。こうした言語の自意識の高まりは、しかし、やはり普遍言語の運動抜きには語れない。『桶物語』執筆動機のひとつが数多の普遍言語学者を諷すことにあったのかどうかは定かではない。しかし『桶物語』のフルタイトルが“A Tale of a Tub, Written for the Universal Improvement of Mankind”⁽³¹⁾であったことは記憶されていい事実である。またタイトルの下方に記されたエピグラフ“Basima eacabasa eanaa irraurista, diarba da caeotaba fobor camelanthi”⁽³²⁾はある一派特有の統辞法がなければ一般人には解読不可能だろう。

普遍、に取憑かれた言語学者はなにもスウィフトの時代だけに限られていたわけではない。スウィフトがもし二十世紀末の今現在、生きていたならこう言っただろう。それは現代にも当てはまる、と。その意味で『桶物語』は一面、普遍の告発の書としても読めるのである。

注

- (1) Michel Foucault, *The Order of Things: an Archaeology of the Human Sciences*, trans. Tavistock Publications (London: Tavistock Publications, 1970), p. 116.
- (2) Jonathan Cohen, “On the Project of a Universal Character,” *Mind*, 63 (1954), 49-63; Benjamin DeMott, “Comenius and the Real Character in England,” *PMLA*, 70 (1955), 1068-81; Benjamin DeMott, “The Sources and Development of John Wilkins’ Philosophical Language,” *JEGP*, 57 (1958), 1-13; Otto Funke, “On the Sources of John Wilkins’ Philosophical Language (1668),” *English Studies*, 40 (1959), 208-14; Barbara Shapiro, *John Wilkins 1614-1672* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1969) 等参照。
- (3) 神尾美津雄「分類と統語——イギリスにおける普遍言語のエピステマー——」『名古屋大学文学部研究論集』第33巻（1987）, 169頁。
- (4) たとえばウイルキンズの *An Essay Towards a Real Character and a Philosophical Language* (London, 1668) の出版はロイヤル・ソサイアティ (the Royal Society of London for the Improving of Natural Knowledge) の立場を苦しめたという。協会のもっとも著名な会員の一人によって書かれ、協会の後援のもとに出版された同著は、協会の威信を著しく失墜させる結果に終わったという。この点は Hans Aarsleff, *From*

『桶物語』の言語論

- Locke to Saussure: Essays on the Study of Language and Intellectual History* (Minneapolis: Univ. of Minnesota Press, 1982), p. 263参照。
- (5) 十七世紀イギリスにおける国語改革運動については Richard F. Jones, "Science and English Prose Style in the Third Quarter of the Seventeenth Century," *PMLA*, 45 (1930), 977-1009; Harold Fisch, "The Puritans and the Reform of Prose Style," *ELH*, 20 (1952), 224-48等参照。
- (6) Murray Cohen, "Sensible Words: Linguistic Theory in Late Seventeenth-Century England," *Studies in Eighteenth-Century Culture*, V (1976), 245-6.
- (7) A. C. Howells, "Res et Verba: Words and Things," *ELH*, 13 (1946), 131-42参照。
- (8) Dan Doll, "The Word and the Thing in Swift's Prose," *SECC*, XV (1986), 199-210参照。
- (9) Ann Cline Kelly, "After Eden: Gulliver's (Linguistic) Travels," *ELH*, 45 (1978), 45.
- (10) テキストは Jonathan Swift, *A Tale of a Tub*, ed. A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith (Oxford: Clarendon Press, 1958) による。
- (11) 『桶物語』の宗教的背景については Philip Harth, *Swift and Anglican Rationalism: The Religious Background of A Tale of a Tub* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1961) が詳しい。
- (12) 生地竹郎『薔薇と十字架——英文学とキリスト教——』(東京、篠崎書林、1977)、237-9頁。
- (13) Murray Cohen, p. 234.
- (14) Thomas Sprat, *The History of the Royal Society of London for the Improving of Natural Knowledge*, ed. Jackson I. Cope and Harold Whitmore Jones (1667; rpt. London: Routledge and Kegan Paul, 1959), p. 113.
- (15) ピーターによる遺言書のギリシアあるいはイタリアの金庫への一時保管は宗教寓意的にはカトリック教会が中世から宗教改革の時代にかけて聖書を自国語に翻訳することや、聖書を庶民が読むことに制限を加えていたことへの批判の含みももちろんある。この点は生地、240頁参照。
- (16) いや、正確には第二章では「ピーター」ではなく、曖昧な普通名詞や修飾語で呼ばれていた学者が第四章ではじめて“PETER”という固有名詞に統一されるのである。HE told his Brothers, he would have them to know, that he was their Elder, and consequently his Father's sole Heir; Nay, a while after, he would not allow them to call Him, Brother, but Mr. PETER. . . (p. 105)
- 学者自身がひとつの呼び名に命名されるとは象徴的な出来事であるが、ともあれ彼はこの後、“Projector and Virtuoso” (p. 105) として様々な奇怪な発明を行なう。

その中には「普遍酢」“Universal Pickle” (p. 109) なるものも含まれている。一方、ピーターとは対照的に末の弟は第六章の冒頭で次男マチン (MARTIN) と共にジャック (JACK) と命名され区別された後 (宗教改革)、第六章の後半で街の少年たちに様々な綽名で呼ばれる。

AND now the little Boys in the Streets began to salute him with several Names. Sometimes they would call Him, *Jack the Bald*; sometimes, *Jack with a Lanthorn*; sometimes, *Dutch Jack*; sometimes, *French Hugh*; sometimes, *Tom the Beggar*; and sometimes, *Knocking Jack of the North*. (pp. 141-2)

ひとつの物 (人間ジャック) が多数の言葉 (綽名) と対応している点、ピーターと対照的であるし、またこれからの数奇な運命をも暗示している。

- (17) 観念は物の記号であり、言葉は観念の記号である、つまり言葉は物の記号の記号である、というロック (John Locke) の記号論を想起させる。言葉と物の間に観念というクッションを置いた点、ロックの記号論は言葉と物のダイレクトな連結をめざした普遍言語記号観とはやや違う。言葉と物の恣意的関係をロックは認めているのである。John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, ed. Peter H. Nidditch (Oxford: Clarendon Press, 1975), p. 405参照。なおジャックとロックの照応関係についてはこの他に Frederik N. Smith, *Language and Reality in Swift's A Tale of a Tub* (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1979), p. 127参照。さらにロックとスウィフトの影響関係については Ricardo Quintana, *Two Augustans: John Locke, Jonathan Swift* (Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1978), pp. 71-82参照。
- (18) ウイルキンズなどは自らの創りだした普遍言語がわずか一ヶ月で誰にでも習得できると信じて疑わなかった。この点は Aarsleff, p. 262参照。
- (19) 『桶物語』脱線部の同時代的背景については Miriam K. Starkman, *Swift's Satire on Learning in "A Tale of a Tub"* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1950) が詳しい。
- (20) 神尾、171頁。
- (21) 『桶物語』のぬしたるこの語り手は決して自分の名を明かさない。グラブ街 (Grub Street) の屋根裏部屋に住む近代主義者であるこの語り手は『桶物語』批評史上、“Hack” と呼ばれることが多い。本稿では慣例に従い便宜上、以後、文士と呼ぶ。なお『桶物語』には厳密には三種の語り手がいる。最初に少しだけ挨拶を宣べる書店主、全編を語る文士、文士の文章を各頁の脚注で注釈する原注者がそれぞれである。
- (22) Harth, p. 75.
- (23) G. W. ライブニッツ「普遍的総合と普遍的分析」伊豆蔵好美訳『季刊哲学 ars combinatoria』1988年創刊号、49-50頁。

『桶物語』の言語論

- (24) E. カッシーラー「普遍言語と認識」木田元訳『季刊哲学 ars combinatoria』1988年創刊号、24-5頁。
- (25) G. W. ライブニッツ「対話——事物とことばとの結合」清水富雄訳『世界の名著30』（東京、中央公論社、1980）、466頁。
- (26) 同466頁。
- (27) Francis Bacon, *The Advancement of Learning*, ed. G. W. Kitchin (London: J. M. Dent & Sons, 1915), pp. 137- 8.
- (28) この点は Smith, p. 19; Ann Cline Kelly, *Swift and the English Language* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1988), pp. 25- 6 参照。
- (29) Jonathan Swift, *The Tatler*, no. 230, in *The Prose Works of Jonathan Swift* (Oxford: Basil Blackwell, 1957), II, 176.
- (30) Ronald Paulson, *Theme and Structure in Swift's "Tale of a Tub"* (New Haven: Yale Univ. Press, 1960), p. 32.
- (31) スミスなどはこのフルタイトルにウイルキンズ個人への当擦りを読みこんでいる。この点は Smith, p. 11参照。
- (32) これは正統派聖者イレナエウス (Irenaeus) の『反異端論』(*Adversus Haereses*, c. 2 C) の中に引用されたグノーシス (Gnosis) 派の言語だとされている。ポールソンは文献学的調査の結果、“I invoke this which is above every power of the Father, which is called light, and spirit and life, because Thou hast reigned in the body” (p. 98) という訳に賛同し、それを根拠に自説の展開を試みているが、スウィフト自身がその意味を知っていたかどうかは甚だ疑わしい。むしろこれはある暗号解読表がなければ無意味な文字の羅列にすぎないことをエピグラフで示したかったのではあるまいか。グノーシス言語とはグノーシス一派にしか理解できないことを特徴としていたのだから。